

特集 学び続ける英語教師であるために

英語教師としての私を支えるもの

—過去・現在・未来—

山元 洋

(千葉県立東葛飾中学・高等学校)

私の勤務する千葉県立東葛飾中学・高等学校は、2016年4月に併設型中学校を開校し、公立中高一貫校としての新たな歩みをスタートさせたばかりである。今回、初めてTEN編集部より「指導力・英語力の向上」というお題をいただき、改めて英語教師として日々、学び続けることの重要性を実感している。

私の授業

入門期は特にinput>outputが原則であるが、私は学習の初期段階からoutputの機会をより多く与えている。生徒は、英語のinputが少ないながらも、苦闘して自分の言いたいことを表現し、何とかして他者に理解してもらおう努力をし、言語能力以外の心理的な要因（「恥ずかしがる気持ちの克服」、「失敗しても大丈夫」、「みんな違ってみんないい」等）をクリアしなければならない。このような状況下では友だちとの助け合い、学び合いは必要不可欠なものとなり、生徒同士の「横」の協力関係が強固なものとなると考えられる。このoutputの機会をより多く与える試みはおおむね機能しており、自分の気持ちや考えを率直に表現できる教室の雰囲気を作り出している。特にプレゼンテーションにおいては、演じること、人に見せること、人に理解してもらおうことを意識して原稿を書き、読むスピードや間の取り方、立ち位置をも考えながら、練習するよう指導している。

私の指導の根っこにあるもの

誤解を恐れずに言うならば、英語は「実技系体育会」教科と私は考えている。すなわち、サッカーでいうシュートやドリブルと同じく、気が遠くなるほどの反復練習なくして英語の習得はない、という認識を持っている。英語の意味や構造を十分理解するこ

とは学習の大前提であるが、学習事項を定着させたり、それらを使って表現活動を行うには、意味を理解した英文を覚えるまで音読することが必要だと私は考える。どうしても頭に入らないときはひたすら書きながら音読し、徹底して反復練習するのである。

この考えは自分の学習方法に起因する。私は小学校5年生の頃からNHKラジオ『基礎英語』、そして今や伝説ともなっている大杉正明先生が講師の頃の『ラジオ英会話』をずっと聞いていた。ただ聞くだけではなく、本文をすべて暗唱・暗写することを中学3年まで続けた。しかし、すべての英文の構造等を完璧に理解していたとはとても言い難い。難解な英文は音と意味だけ把握して、覚えるまで無心で音読し、書いていた。

そのようにしてどうにか英語を教える立場に立った私が、指導力・英語力向上のために行ってきたこと、現在行っていること、これから行いたいことについて述べたいと思う。

高校の授業を持つこと・見ることで学ぶ

これまで勤務してきた私立公立の中高一貫校において、中学と高校の授業を同時に持つ機会が多かった。高校生の姿やレベルを肌で感じて、中学生を3、4年後に同レベルかそれ以上に引き上げるには、何をしなければならないか、という発想で授業を組み立てることが自然であった。結果、中高6年間を見通した指導の視点を持つこととなった。

もっと単純に考えれば、高校レベルの教材研究を行うことで、自らの英語力の維持・伸長に直結した。中学1年生に自己紹介プレゼンの指導をした次の時間は、高校生の副教材（大学入試レベル）の読解の授業を行う、というような具合である。初めは切

り替えが難しいが、慣れてくると新たな指導観が自分の中に生まれるので、中高一貫校に勤務し続ける限り、これからもずっと続けていきたいことである。

同僚から学ぶ

本校では、現在、もう一人の中学本務の英語科の先生と二人で中学1期生の授業を担当している。二人で同じことを実践しており、授業前には授業案を共有し、入念な打ち合わせも行う。授業実施後も互いにフィードバックを行っている。

月並みではあるが、指導力の向上にはこれがいちばん手取り早く即効性がある。これまで勤務した学校を含め、特に英語で指示を出す際、どんなタイミングでどんな英語を使っているか、同僚の先生方を注意深く観察させていただき、いいと思ったらすぐに使ってみようとしている。自分が今まで使っていたものよりも生徒が素早く理解し動くこともあれば、逆にうまく指示が伝わらないこともあり、試行錯誤ではあるが、指示のバリエーションは増え続けている。最近取り入れた例としては、ペア活動のときの Exchange your role. / Change role. ⇒ Change part, また Are you ready? ⇒ All set?, そして Look at me. ⇒ Eyes on me. などである。

また、ちょっとした声かけとそのタイミング、話題の出し方や関連付け方、どんな場面でどのような「技」を使ってパワーポイントを提示しているかなど、他教科の先生方から学ぶこともとても多い。幸い、本校には「互見週間」という取り組みがある。年に2回それぞれ1週間ずつ、先生方がお互いの授業を教科の垣根を越えて参観し合い、最終日に全体会を開いて授業について協議するものだ。転勤が宿命の公立校において、2期生以降も同様な指導を行い、教員が替わっても継続できる「東葛中スタイル」の英語指導の確立を目指し、このような場を活用し同僚から学び、研鑽を積んでゆきたい。

部活動指導から学ぶ

部活動に関わったことから、サッカーの指導概念や方法が集団を動かすうえで大いに参考になっている。クラスをチームとして考え、集団として生徒を

動かすトレーニングを積ませることで、生徒同士の関わり合いを通して深い学びや期待以上の成果を導くことが可能である。例えば、単純なパス練習Aと動きに制約のあるパス練習B、制約を加えたシュート練習Cを順番に反復練習し、その後A,B,Cをすべて組み合わせた練習を行い、最後にすべての制約を解いてゲームを行うと、子どもたちは練習した動きをベースにしているものの、指導する側が想定していないアイデアからゴールを奪うことが何度も起きるのである。これは、音読やペアワーク、パターンプラクティスといった英語の基礎を作り上げる反復練習を積み重ねた結果が、プレゼンなどでの成功に繋がっていくのと同じである。

また、私の教員としての指導理念の大きな幹となったのが、サッカー元日本代表監督のイヴィツァ・オシムのことだと、その根っこにある彼の指導の考え方である。オシムは「厳しくも温かく」選手を鍛える指導者であり、彼の「育てながら勝つ」理念は、教員である私の立場に置き換えると、「育てて結果を出す」とほぼ同義となる。

休みがなく、不満を溜めている選手たちに向かって『君たちはプロだ。休むのは引退してからで十分だ。』、負けた試合後の記者会見で『どうして勝てなかったのか。練習で追求させる必要がある。選手たちにはもっと練習してもらおう。』など、オシムは示唆に富む独特の表現で選手を鼓舞している。このことばを英語学習の文脈で読み替えると、前者は『君たちは学生だ。学ぶのをやめるのは卒業してからで十分だ。』、後者は『どうしてプレゼンがうまく行かなかったのか。授業、家庭学習で追求させる必要がある。子どもたちにはもっと反復練習してもらおう。』と考える。

他にも、英語既習者向けの雑誌を読んだりすることもあるが、何ととっても、悪戦苦闘しながらも何とか英語で自己表現しようとする生徒たちから、一番たくさん示唆をもらっている。そういう意味では、ここまで書いてきたような努力を生かして「授業をすること」が、最大の指導力・英語力向上に繋がると信じ、私は今日も教室へ向かう。

【参考文献】
木村元彦(2008).『オシムの言葉』集英社文庫.